

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.56

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

巻頭エッセイ

「日本の英学 200 年記念合同大会」の余韻

田 中 正 道

本会報は先般、長崎市で開催された日本の英学 200 年記念合同大会の後リリースされる会報なので、それについて触れてみたい。

2008 年はフェートン号事件 (1808) から数えて丁度 200 年目の当たり年、その年に日本英学史学会第 45 回全国大会ならびに日本英語教育史学会第 24 回全国大会がゆかりの地、長崎大学を会場に 10 月 25 日 (土) から 10 月 27 日 (月) まで合同で開催されたことは特筆に値するイベントであったと思う。何が特筆に値するかというと、開催地が幕末から明治にかけての歴史の重みを直接体感できる長崎という最高のロケーションであったこと、いま一つは両学会の合同の大会がすばらしい連携のもと、発表者ならびにフロアーともどもが学会の成功・研究の深化に「全力投球」で臨み、その結果を出したという点にある。

記念シンポジウムの講師、各分科会の発表者はそれぞれが多年に渡って追及してきた研究テーマを披露された。一つ一つが、言わば、自分の「持ち歌」、「得意技」、「お家芸」であり、それらを参会者に存分にお披露目されたわけでその迫力は圧倒的であった。「博覧強記」のお手本を垣間見たという思いの参会者も多かったことと思われる。

それにしても、オランダの国旗を掲げて長崎港へ入港した英国船フェートン号は大変なことをしてくれたものである。日本がその後歩んだ 200 年を振り返れば、そのインパクトが計り知れないものであったことは自明である。日本人はありとあらゆる分野・領域で西欧文化の吸収、咀嚼を行って来た。それらの営みを正確に記録に留め、その作業の過程で得られた教訓をこれからの 100 年あるいは 200 年にどのように生かすかを考えるのが 21 世紀に生きるわれわれ一人ひとりの任務であると信ずる。

長崎は今後も英学史研究の原点であるし、また、そうあり続けて欲しいものである。

(日本英学史学会中国・四国副支部長)

日本英学史学会中国・四国支部

平成20年度 第2回(通算59回)研究例会のご案内

本年度第2回(通算第59回)研究例会を、来る12月13日(土)に福山市にて開催する運びとなりました。開催準備にあたりましては、理事の小篠敏明先生に格別のご配慮を賜りました。篤くお礼申し上げます。

今回の研究例会では、山田宗八先生、田中正道先生、馬本 勉先生による研究発表が予定されています。ご多忙中とは存じますが、会員の皆様にはぜひ福山の地にご参集いただきますようご案内申し上げます。

恒例にしがって今回も、研究例会のあとに忘年懇親会を企画いたしております。こちらの方へも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

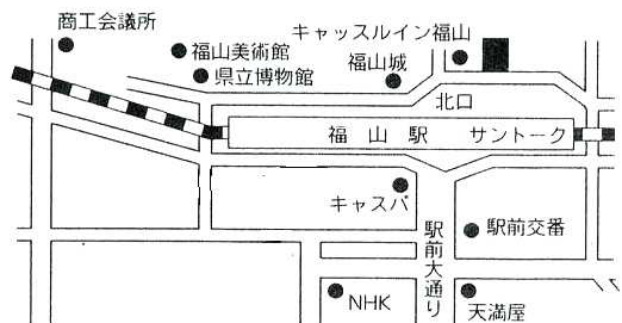
研究例会プログラム

日時： 12月13日(土) 12:30 受付開始

会場： 福山大学社会連携研究推進センター
(宮地 茂 記念館)

〒720-0061 福山市丸之内 1-2-40
(JR 福山駅北口)

福山大学社会連携研究推進センター (宮地 茂 記念館)



受付(12:30～)

開会行事(13:00-13:10)
支部長挨拶

研究発表 (13:10-14:10)
山 田 宗 八(山田共学道場)
「生麦事件の一考察 — 薩英戦争の歴史的意義を探る — 」

(休憩 14:10-14:20)

研究発表 (14:20-15:20)
田 中 正 道(兵庫教育大学名誉教授・広島大学名誉教授)
「昭和初期のラジオ『夏期英語会話講座』」

(休憩 15:20-15:30)

研究発表 (15:30-16:30)
馬 本 勉(県立広島大学)
「妹尾啓司文庫にみる広島の英学」

(感想記入 16:30-16:40)

閉会行事(16:40-17:00)
副支部長挨拶、写真撮影

懇親忘年会(17:30-19:30)(福山駅周辺の会場を予定、会費 5,000 円程度)

< 研究発表の概要 >

生麦事件の一考察 — 薩英戦争の歴史的意義をさぐる

薩英戦争の生き証人 英国人医師 William Willis の書簡と当時横浜で発行されていた週刊英字新聞 The Japan Herald & The Illustrated London News が伝えた生麦事件について 薩英戦争の歴史的意義を探る。

昭和初期のラジオ「夏期英語会話講座」

日本でラジオの本放送が始まったのは大正 14 年 (1925) である。本発表では日本放送協会が第一放送で放送した教養番組「夏期英語会話講座」[昭和 10 年(1935) ~ 昭和 14 年 (1939)]の番組編成、講座内容、担当講師等にスポットを当てその特徴を浮き彫りにする。

妹尾啓司文庫にみる広島英学の英学

故妹尾啓司先生は、私たちの支部に多くの蔵書をご寄贈くださった。その一部は県立広島大学庄原キャンパス図書館に入っている。本発表は、先生の旧蔵書の中から広島英学と関わるものを紹介し、考察を加えようとするものである。

福山例会のご出欠をお知らせください。11 月末日までに、メール (umamoto@pu-hiroshima.ac.jp) もしくは同封の参加申込書にてご回答くださいますようお願いいたします。

中国・四国支部ニュース

『英学史論叢』第 12 号原稿募集

中国・四国支部研究紀要『英学史論叢』第 12 号 (2009 年 5 月発行予定) の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、次ページに掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。

・投稿予定の方は「投稿申込」をお願いします。
2009 年 1 月 31 日 (土) までに事務局へメール (umamoto@pu-hiroshima.ac.jp)、または FAX (0824-74-1725) にてお申し込みください。

・原稿提出の締切は、**平成 21 年 2 月 20 日 (金)** (消印有効) です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートへのご投稿は、正副計 3 部をお送りください。英学史随想、書評等の原稿は 1 部お送りください。

ラフカディオ・ハーンの会のご案内

風呂 鞏先生主宰の「ラフカディオ・ハーンの会」100 回の開催を記念し、小泉凡先生 (中国・四国支部顧問) の講演会が開催されます。皆様奮ってご参加くださいますようご案内申し上げます。

日時： 12 月 6 日 (土) 午後 3 時 ~ 5 時
会場： 広島市まちづくり市民交流プラザ
北棟 5 階 研修室 C
(広島市中区袋町 6-36 / TEL 082-545-3911)
会費： 無料

講演テーマ：

「ハーンとヨーロッパ」新考—最近の旅から—

講師： 小泉 凡 先生 (小泉八雲曾孫、
島根県立大学短期大学部准教授)

講演概要：

ハーンがピット・リヴァース博物館に寄贈した護符の意味、ギリシア・キセラ島民のハーンとローザへの熱いまなざし、アテネ・アメリカンカレッジでのハーン顕彰の動き、ここ数年のアイランドと松江・出雲の交流の特徴など新しい「ハーンとヨーロッパ」の動きに光を当てたいと思います。

問合せ： ラフカディオ・ハーンの会事務局
風呂 鞏 (TEL&FAX: 082-843-0066)

『英學史論叢』執筆要領

- ・『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート、その他のものとも、原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいたものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会には必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10ページ以内とする。
- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ、電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は1編につき3,000円とする。ページ数を超過した場合は、1ページにつき1,000円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部への執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英學史論叢』標準書式

- ・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。
- ・本文は、10ポイントないし10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。
- ・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18~20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴシック体とするか、下線を施して見やすくする。
- ・注は、脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。

20mm	38字	20mm	20mm	38字	20mm
英 学 の 叢 書 8行分 ト ル — その起源と発展 — 藤 野 波 平 1. はじめに 現在広島県となっている安芸の国、備後の国のうち、早くから洋学研究の必要を認識し、.....としていた。 このような動きに見られる英学の歴史は、..... 2. 英学の萌芽 幕末期、文芸においてもやはり、英字に先立ち漢字が.....であった。かくして、藩校修進館に学んだこれらの人々の 25mm 38行 20mm と伝えられている¹⁾。しかしながら、これらの人々に共通に見られる特徴は、.....。 注 ¹⁾ 河原田(1968: 35-38)参照。 ²⁾ この幕府の変遷については福島(1952: 9)参照。 参 考 文 献 豊田寛(1939)『日本英学史の研究』(岩波書店) 福島正剛(1952)『石垣修徳』『城郭研究』6号9頁 河原田睦夫(1968)『広島県の歴史』(誠信堂出版) (英広大学教育学部)					

英学史学会全国ニュース

>> 日本の英学 200 年記念合同大会

日本英学史学会第 45 回全国大会・
日本英語教育史学会第 24 回全国大会

今年度の日本英学史学会全国大会は「フェートン号事件 200 年」を記念し、長崎大学（長崎市）を会場に日本英語教育史学会（第 24 回全国大会）との共催で行われました（2008 年 10 月 25 日（土）～27 日（月））。

本支部所属会員の研究発表は次の通り。

- ・「長崎（日本）滞在中の見聞」（フェートン号）が伝えるもの—海軍と英学の視点から—（寺田芳徳）
- ・「英語教授」と「英語教育」—用語の推移について—（松村幹男）
- ・森 修一と庄原英学校（馬本 勉）
- ・ガイガー女史による英語教育講習会—昭和 20 年代英語教育史—（隈 慶秀）
- ・開成所『英吉利単語篇』と『對譯名物圖編』・『英國単語圖解』（竹中龍範）
- ・デニングの English Readers と田中稻城（保坂芳男）
- ・英語教科書のリーダビリティの変遷—新開発指標から見た場合—（小篠敏明）
- ・日本英語音声教育史『英語発音秘訣』の著者菊地武信の足跡を求めて(2)（田邊祐司）

『英学史研究』第 41 号

今年度の学会紀要が発行されました（10 月 1 日）。以下の論文等が掲載されています。

[論文]

- ・博物学者としての F. V. ディキンズ（岩上はる子）
- ・岡倉由三郎 The Life and Thought of Japan 考（平田諭治）
- ・お雇い英国人教師ヘンリー・ダイアーの日本研究（加藤詔士）
- ・『英和対訳袖珍辞書』の底本の編纂者 H. Picard（三好彰）
- ・『英吉利文典』（木の葉文典）各版について（石原千里）

[資料調査・研究ノート]

- ・英学者本田増次郎の改姓をめぐる（長谷川勝政）
- ・堀達之助と『英和対訳袖珍辞書』の成立（遠藤智夫）

「日本英学史学会報」No.116

年 3 回発行されている「日本英学史学会報」No.116 が発行されました（9 月 1 日）。

「長崎特集」の記事などが掲載されています。

- ・フェートン号事件は 10 月 4 日か 14 日か（伊村元道）
- ・フルベッキと長崎（村瀬寿代）
- ・大著の陰に通詞あり（河元由美子）
- ・フェートン号事件関係文献（向井晃）ほか

「日本英学史学会報」No.116 には、支部活動報告として、中国・四国支部平成 20 年度総会ならびに第 1 回（通算 58 回）研究例会報告、『英学史論叢』第 11 号目次などが掲載されています。

日本英学史学会（本部）の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です（入会金 2,000 円、年会費 5,000 円）。問い合わせは事務局まで。

平成 20 年度豊田賞

豊田賞（日本英学史学会賞）

- ・高橋俊昭『英学の時代 — その点景』学術出版会, 2008.
- ・庭野吉弘『日本英学史叙説—英語の受容から教育へ』研究社, 2008.

日本英学史学会功労賞

- ・井田好治『日本英学史論選集』Culture Publication, 2008.

英学史情報ひろば

Tanaka, Masamichi (田中正道) *A History of English Language Testing in Japan*. Keisuisha, 2008.

日本英語教育史学会「日本の英語教育 200 年」研究グループ「日本の英語教育 200 年」（大修館書店『英語教育』誌連載）

- ・第一回（2008 年 10 月号）
- 「フェートン号事件から 200 年—日本人にとっての英語とは—」（竹中龍範・伊村元道）
- ・第二回（2008 年 11 月号）
- 「学びやすさを求めて—教科書の歴史から—」（小篠敏明・田邊祐司）

投稿エッセイ

両学会の Collaboration と Contrast

—「日本の英学 200 年記念合同大会（長崎）」に参加して—

鉄 森 令 子

路面電車から眺めてみる外の風景は 20 数年前の広島市千田町にタイムスリップしたかのようであった。平和公園、路面電車、細い路地、出島。広島とよく似ている街、長崎。

フェートン号 200 年記念 英学史、英語教育史学会合同記念大会。「行く？行かない？」「行きたい、行けない？」と迷った末、私は日本英語教育史学会の会員として参加した。

200 年前のフェートン号事件は日本にどのような影響を与えたのか、何の意味があったのか、「長崎」に行けば何か得ることができるのではないだろうか。また、この歴史的意義のある大会には参加しておきたい。そんな思いであった。

初日のシンポジウムは長崎三昧の内容であった。大会メインの研究発表も「フェートン号」「英学」「英語教育」「英学校」等、どのジャンルも充実した内容であった。できれば、すべての発表を拝聴したかったが、取舍選択を余儀なくされるのはとてもつらかった。

2 日間も十分満足であったが、今回の目玉は 3 日目の史跡見学であった。長崎大学の武藤文庫、異国情緒の香る外国人居留地、長崎歴史文化博物館、坂の多い街に貧弱な足は悲鳴をあげていたが、心は歓声をあげていた。

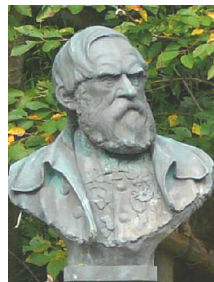
充実した時間は予定より大幅にオーバーし、お昼過ぎに中華街で解散となった。ボリュームたっぷりの名物皿うどんに舌鼓を打ち、いざ、出島へ。当時の地形を想像するには厳しかったが、資料等を基に想像をめぐらせた。

200 年前のフェートン号事件は現代の私たちに何を残してくれただろうか。私たちがそれを 200 年後に残していくべき「財産」ではなからうか。そんな思いをフリーズドライにして、重たいカバンをひきずりながら長崎を後にした。

創立 44 年の日本英学史学会は風格と重みを兼ね備えている。創立 24 年の日本英語教育史学会はフレッシュで躍動感がある。そんな両学会の Collaboration と Contrast を間近に見た大会であった。

(広島県立高陽高等学校)

広島英学史の周辺(22) 長崎高等商業学校教授・武藤長蔵博士は、経済学史、鉄道論、交通論などの講義の際に、いつも数十冊の洋書を教室に持ち込んだといひます。文学や芸術にまでおよぶ「脱線講義」は有名で、そこから学生たちは世界や長崎、そして人生を学んだそうです(長崎大学広報誌「長報」vol.3 (2003 年 4 月)より)▼「武藤文庫」を訪ねた際、ある先生から「牧野文庫のようだね」と声をかけられました。2004 年の高知例会で見学した牧野富太郎博士の旧蔵書と同じように、今回も強い感銘を受けました。何かが胸の中でじわじわと盛り上がってくるような高揚感は、膨大な量の書物を目の当たりにしたから、だけではなさそうです。分野の異なる両博士に共通する「関係資料はすべて集める」という精神に痺れました。興味の幅広さが研究の厚みを増すのだと、改めて思いました。「武藤文庫」の一番奥の棚に『出家とその弟子』の英訳本を見つけて嬉しくなった私です▼シーボルト記念館では、彼が持ち出した日本地図を間近に見ました。そのガラスケースの前である先生から、地図を贈って投獄された高橋景保の研究者・上原 久氏(『高橋景保の研究』



の著者)は庄原出身だ、と教えていただきました▼見学コースからちょっと寄り道して、立山防空壕(長崎県防空本部跡)へ。8 月 9 日の第一報は、この中に設置された知事室に届けられたそうです▼長崎の地で、英学と広島を考える 3 日間でした▼急に寒くなり、紅葉が一気に進みました。冬が近づいて来ます。皆様ご自愛のほど。福山例会でお会いしましょう。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.56

2008 年 11 月 11 日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町 562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.56 November 11, 2008